

# シーボルトのまなざしと彼が蒐集したもの

これまでシーボルトについて研究していて、感じたことがいくつかある。それは、彼が第一次来日（1823年－29年）の際に蒐集したものから、見えてくるものがあるということである。外国人が日本から持ち出すことが禁止されていた地図等の持出しが発覚した、所謂シーボルト事件によって国外追放処分を受けたシーボルトは、オランダに帰った後、日本で集めた膨大な資料を整理し『日本』をはじめとする著作に着手した。またその傍ら1832年にはライデンのラーペンブルグの借家に個人のコレクションを展示、そこを「日本博物館」と呼んで集めた資料を一般に公開した。ここには、ロシアの皇太子アレクサンドルをはじめオランダ国王、プロシア国王等各国の要人達が訪れている。彼の蒐集したコレクションに対する関心がいかに高かったかが伺われる。その後、シーボルトはオランダ国王ウイレムI世にコレクション購入の約束を実現するよう申し出ると共に、民族学博物館の設立を提案した。その結果、1838年にシーボルトが蒐集したこれらのコレクションは国王の購入するところとなり、ハーグの王立骨董陳列室に収められていた前出島商館長のブロンホフや荷倉役のフィッセルの日本コレクションと統合され、貴重な日本コレクションとなった。現在のライデン国立民族学博物館の中核はこうして出来上がったのである。

この他、1839年コペンハーゲンの国立博物館のトムゼンがライデンのシーボルトを訪問し、ヨーロッパ以外の諸民族の生活の様子を示す博物館の設立を相談した際には、それに応じている。2年後の1841年コペンハーゲンの国立博物館に民族部門が設けられ、これが世界初の民族学博物館となるわけだが、シーボルトはここにもこうした形で関わっている。このように、彼は民族学研究の先駆的役割をはたした人物ということもできる。それでは、シーボルトの民族学博物館構想にはどのような考えがあったのであろうか。そこには、次のようなまなざしが見えてくるように思われる。日本での調査研究の経験から、世界にはヨーロッパとは異なる民族が存在し、それぞれ独自の歴史や文化を持っており、その全てが学問的研究の対象になりうるというものである。このような考え方は今日の文化人類学の根本にある文化相対主義とも深く関わっていると見ることができる。

シーボルトが蒐集した民族学コレクションが数多く収められているライデン国立民族学博物館は、今日から見るとまさに近世日本のタイムカプセルというものであり、そこには、江戸時代の庶民の生活の様子を示すものが数多く見られる。また、彼の関心は日本だけにとどまらず周辺地域の朝鮮や蝦夷にも及んでいることから、蒐集資料の中には他の民族学的資料も多く含まれている。さらに、彼の集めた自然科学のデータや標本からは当時の日本の動物や植物の生息状態や分布状況も分かるのである。資料の一つとして、現在ライデン国立自然史博物館にある「ニホンアシカ」や「ニホンオオカミ」の剥製標本は、今日の日本では絶滅してしまった動物の存在を知る上で貴重なものといえる。ライデン国立植物標本館にあるシーボルトの標本で、基準標本となっている「コマクサ」は長野の木曾御岳と産地が記されているが、これも現在御岳では絶滅してしまったものである。そうした意味でこれらの標本は、当時の日本の動物相や植物相を知る上で貴重な資料といえる。これらシー

ボルトの研究の基になった資料は今日オランダのライデンにある三つの博物館の他、生きている植物をライデン大学付属植物園で見ることができる。

今後シーボルトが蒐集した文献をはじめ絵画等の民族学的資料や、剥製標本等の自然科学的資料を詳細に調査研究することにより、日本にある資料だけでは解明されない江戸時代の庶民の生活の実態やそれを取りまく自然環境がより明確になることが期待できる。シーボルトは、日本にあるものを出来るだけ多く集めそれを整理し体系化することで、日本の文化や自然、社会そして民族を総合的に捉えようとした。こうした彼の姿勢は、21世紀の今日「文明」というものを考えるうえでも我々に大きな示唆を与えてくれるような気がする。

文明研究所所長  
沓澤 宣賢

#### 参考文献

- ・アルレッテ・カウヴェンホーヘン，マティ・フォラー『シーボルトと日本 その生涯と仕事』（Hotei 出版 2000）
- ・石山禎一『シーボルトの日本研究』（吉川弘文館 1997）
- ・佐々木秀彦「シーボルト・コレクションとその背景」（江戸東京博物館 国立民族学博物館編『シーボルト 父子のみた日本 生誕二百年記念』（ドイツー日本研究所 1996）
- ・ミュージアムパーク茨城県自然史博物館編『シーボルトの愛した日本の自然—紫陽花・山椒魚・煙水晶』（ミュージアムパーク茨城県自然史博物館 2000）